

昭和三十七年十二月一日 印刷

荷風全集第六卷

昭和三十七年十二月五日 發行

定價六百圓

著 者 永 井 壯 吉

發 行 者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
株式會社 岩 波 書 店

目 次

柳さくら	一
散柳窓夕榮	五
戀衣花笠森	六
花 瓶	一〇一
假 面	一四七
うぐひす	一六三
夏すがた	一七五
腕くらべ	二〇九
後 記	四二三

柳
さ
く
ら

序

曾てかの國にありし時われ伊太利亞の作曲家プツチニがつくれる歌劇胡蝶の曲なるものを聴きぬ。わが長崎の歌妓阿蝶と外客との戀を歌へるものなり。箏曲の六段はチョンキナの俗謡に交り長唄の越後獅子は寢んねんようの子守唄に混じて管絃樂中に演奏せられ、舞臺には菊櫻菖蒲蓮楓なんぞ四季の花木皆一つ處に並べ飾られたり。然れども彼の國の批評家は能く日本の美と眞とを傳へたる名曲となし擧つて歐洲現代樂壇の傑作となす事を憚らざりき。プツチニがこの名曲は歐洲人の感覺に觸れたる「日本」なるものを把り來つて之を管絃樂の上に移したるものなり。されば日本人の感覺に觸れたる日本とは元より同一のものならず。われ今江戸時代を背景となせる短篇小説二種を公にするに當り江戸の古老と嚴格なる史家と並に文壇の評家とに對して自ら辯護せんと欲する處のものは實にこの「感覺」の一事にあり。我は觀光の外客が日光の廟と嚴島の鳥居と富士山と櫻花と藝妓とを看て過ぎて以て日本の特色に接したりとなせるが如く錦繪と草雙紙とを看これによつて刺戟せられたる審美的感激を以て直に江戸と稱する過去の空氣に觸れ得たるものと

なせり。余の慮るところは印象個々の如何にあらず。寧個々の印象を排列せんとする時こゝに必要なる調和の一事に在りとす。調和とは何ぞや。作品の背部に一貫する作者の情調なり。試に江戸演劇の舞臺を見よ。「曾我」と稱し「暫」と呼ぶが如き人物は甚しく史實に遠かりて而もよく渾然として芝居とよべる特種の藝術的世界の中に活躍せり。あらゆる不條理と奇怪とは其衣裳背景の色彩と並に三絃の曲調とによりて悉く美妙なる調和の中に溶解せられたり。今わが拙作の小説柳さくらに於けるや冀ふところのものは唯作家の情調にしてよくかの三絃の曲調の如く其の文辭にして能くかの衣裳背景の色彩に等しき効果を保たしめん事のみ。

甲寅新春

荷風小史

散柳窓夕榮

一

天保十三壬寅の年の六月も半を過ぎた。いつもならば江戸御府内を湧立ち返らせる山王大權現の御祭禮さへ今年は諸事御儉約の御觸によつてまるで火の消えたやうに淋しく濟んでしまふと、それなり世間は一入ひつそり盛夏の炎著に靜まり返つた或日の暮近くである。修紫田舎源氏の版元通油町の地本問屋鶴屋の主人喜右衛門は先程から汐留の河岸通に行燈を掛ならべた唯ある船宿の二階に柳下亭種員と名乗つた種彦門下の若い戯作者と二人ぎり、互に顔を見合はせたまゝ團扇も使はず幾度となく同じやうな事のみ繰返してゐた。

「種員さん、もう臆て六ツだらうが先生はどうなされた事だらうの。」

「別に仔細はなからうとは思ひますがさう申せば大分お歸りがお遅いやうだ。事によつたらお屋敷で御酒でも召上つてゐるのでは御ざいますまいか。」

「何さまこれア大きにさうかも知れぬ。先生と遠山様とは堺町あたりでは其の昔隨分御耽懸であ

つたとかいふ事だから、その時分のお話にいろ／＼花が咲いて居るのかも知れませぬ。」

「遠山様と云ふ方は思へば不思議な御出世をなすつたものさね。つい此間までは人のいやがる遊人^{あそび}とまで身を持崩してゐなすつたのが暫くの中に御本丸^{ごほんまる}の御勘定方^{ごかんぢやうがた}におなりなさるなんて、此まで御番衆^{ごばんしゆう}の方々^{かたがた}からいくらかも出世をなすつた方はあらうけれど遠山様のやうな話がありますまい。」

「どうかまア遠山さまの御威光で先生の御身の上に別條のないやうにしたいもんさ。萬一の事でもあらうものなら、手前^{てまへ}なんぞは先生とはちがつて蟲けら同然の素町人^{すちやうにん}故、事によつたら遠島^{えんたう}かまづ輕い^{けつしよ}ところで缺所^{けつしよ}は免れ^{まぬか}まい。」

「もし鶴屋さん、縁起でもねえ。そんな薄氣味の悪い話はきつい禁句だ。そんな事を云ひなさると何だか居ても立つても居られないやうな氣がします。ぼんやりこゝで氣ばかり揉んでゐても始まらぬから私はその邊まで鳥渡^{ちよつとひと}一ツ走り御様子を見て参りませう。」

種員^{さんとも}は棧留^{さんりゆ}の一つ提^{ひと}を腰に下げて席を立ちかけたが、その時女中に案内されて梯子段^{あが}を上つて來たのは、何處ぞ問屋の旦那衆かとも思はれるやうな品の好い四十あまりの男であつた。越後上布^{えちごじやうふ}の帷子^{かたびら}の上に重ねた紗^{しや}の羽織にまで草書^{さうしよ}に崩した年の字をば丸く寶珠の玉のやうにした紋をつけて居るので言はずと歌川派^{うたがははな}の浮世繪師五渡亭國貞^{うきよえい}とは知られた。鶴屋はびつくりして、

「これは／＼龜井戸^{かめゐど}の師匠。どうして手前共^{てまへども}が爰^{こゝ}に居るのを御存^{ごぞん}じで御ざりました。」

「實は今日さる處まで暑中見舞に出掛けた處途中でお店の若衆に行き逢ひ堀田原の先生が日蔭町のお屋敷へしかゝとのお話を聞き、私も早速先生の御返事が聞きたさに急いでやつて來ましたのさ。時に先生はまだ遠山様のお屋敷からはお歸りがないと見えますな。」

國貞は歩いて來た暑さに頻と團扇を使ひ初める。立ちかけた種員は再び腰なる煙草入を取出しながら、「五渡亭先生も御存じで御座いませう。手前と相弟子の彼の笠亭仙果がお供を致しまして御屋敷へ上つて居りますから、私は今の中一走り御様子を見て參らうかと思つてゐた處で御座ります。もう追付お歸りとは存じますが何となく氣がゝりでなりませぬ。」

「いかにも不斷から師匠思ひのお前さん故さぞ御心配の事だらうと重々お察し申します。私なぞは申さば柳亭翁とは一身同體。今日此頃では五渡亭國貞と云へば世間へも少しは顔の賣れた浮世繪師。それといふも實を申せば田舎源氏の繪をかき出してからの事ゆゑ、萬が一お咎めの筋でもあるやうなら私は所詮逃れぬ處だと、とうから覺悟はきめてゐますが、お互にどうかまアそんな事にはなりたくないもの。」と國貞は聲を沈まして、忘れもせぬ文化三年の春の頃、其の師歌川豐國が繪本太閤記の挿繪の事よりして喜多川歌麿と同じく入牢に及ばうとした當時の恐しいはなしをし出した。すると鶴屋の主人もついゝ其の話につり込まれて六七年前に大酒で身を損ねた先代の親爺から度々聞かされた話だと云つて、これは寛政御改革の砌山東庵京傳が黄表紙御法度の御觸を破つた

爲め五十日の手鎖、版元蔦屋は身代半減といふ憂目を見た事なぞ、やがて談話はそれからそれへと移つて遂には英一蝶が八丈島へ流された元祿の昔にまで溯つてしまつたが、これは五渡亭國貞が先頃から英一蝶に私淑して其の號まで香蝶樓と呼んでゐたが爲めであつた。折から耳元近く轟々と響きだす増上寺の鐘の聲。門人種員はいよゝゝ種彦の様子を見に行かうと立上り大分山の痛んでゐるらしい帶の結目を後手に引締めながら簾を下した二階の欄干から先づ外を眺めた。日の長い盛りの六月の事とて空はまだ晝間のまゝに明るく青々と晴渡つてゐた。いつもならば向河岸の屋根を越して森田座の幟が見えるのであるが、時節柄とて船宿の棧橋には屋根船空しく繋がれ芝居茶屋の二階には三味線の音も絶えて彼方なる御濱御殿の森に群れ騒ぐ鳥の聲が耳立つばかりである。夕日は丁度汐留橋の半程から堀割を越して中津侯のお長屋の壁一面に烈しく照り渡つてゐたが、然し夕方の涼風は見えざる海の方から、狭い堀割へと渦巻くやうに差込んで来る上汐の流れに乗じて、或時は道の砂をも吹上げはせぬかと思ふ程つよく欄干の簾を動し始める。

國貞と鶴屋の主人は共に風通しのいい此の欄干の方へと其の席を移しかけた時、外を見てゐた種員が突然飛上つて、「皆さん、先生がお歸りで御座ります。」

「なに先生がお歸り。」

云ふ間もおそし、一同はわれ遅れじと梯子段を駆け下りて店先まで走り出ると、差翳す半開きの

扇子に夕日をよけつゝ靜に船宿の店障子へと歩み寄る一人の侍。これぞ當時流行の草双紙田舎源氏の作者として誰知らぬものなき柳亭種彦翁であつた。細身造りの大小、羽織袴の盛裝に、意氣な何時もの着流しよりもぐつと丈の高く見える瘦立の身體は危いまでに前の方に屈まつてゐた。早や眞白になつた鬢の毛と共に細面の長い顔には傷しいまで深い皺がきざまれてゐたけれど、然し日頃の綺麗好に身じまひを怠らぬ皮膚の色はいかにも滑かにつやくして、生來の美しい目鼻立の何處やらにはさすがに若い頃の美貌の程も窺ひ知れるのであつた。

種彦は今日しも老體の身に六月大暑の日中をもいとはず、豫てより御目通りを願つて置いた芝日蔭町なる遠山左衛門尉様の御屋敷へと人知れず罷り越したのである。仔細といふは外でもない。去頃より御老中水野越前守様寛政御改革の御趣意を其のまゝに天下奢侈の惡弊を矯正すべき有難き思召により遍く江戸町々へ御觸があつてから、已に葺屋町堺町の兩芝居は淺草山の宿の邊鄙へとお取拂ひになり、又役者市川海老藏は身分不相應の贅澤を極めたる廉によつて此の春より御吟味になつた。それや此れやの事から世間では誰いふともなく好色本草双紙類の作者の中でも取分け修紫田舎源氏の作者柳亭種彦は光源氏の昔に譬へて畏多くも大御所様大奥の祕事を漏したにより必ず厳しい御咎になるであらうとの噂が頗る喧しいのであつた。種彦はわが身の上は勿論若しや其の爲めに罪もない繪師や版元にまで禍を及ぼしてはと一方ならず心配して、斯うなるからは誰ぞ公邊の知人

を頼り内々事情を聞くに如くはないと兼て芝居町などでは殊の外懇意にした遠山金四郎といふ旗本の放蕩児が、いつか家督をついで左衛門尉景元と名乗り、今では御本丸へ出仕するやうな身分になつてゐるのを幸ひ、是非にもと縋付いて極内々に面會を請うた次第であつた。

「先生、早速で御座いますが御屋敷の御首尾はいかゞで御座りました。」

一同は一先種彦を二階へ案内するや否や、茶を持運ぶ女中の立去るをおそしと、左右から不安な顔を差伸ばすのであつた。種彦は脇差を傍に扇を使ひながら少し身をくつろがせ、

「いや、もうさして御心配なさるにも及ぶまい。遠山殿の仰せには町方の事とは少々御役向が違ふ故、あの方の御一存では慥とした事は申されぬが、何につけお上に於ては御仁恵が第一。それに取分け此度の御趣意と申すは上下舉つて諸事御儉約を心掛けいといふ思召故、それ〴〵家業に精を出し贅澤なことさへ致さずば、さして厳しい御詮議にも及ぶまいとの仰せ。それだによつて此際はお互によく氣をつけ精々間違のないやうに慎んで居るがよからう……。」

「左様で御ざりましたか。それでは別に差當つて御叱を蒙るやうな事はなからうと仰有るんで御座いますな。いや、先生、其の御言葉を聞きまして手前はもう生き返つたやうな心持になりました。」

版元鶴屋は襟元の汗をばそつと手拭で押拭ふと、國貞も覺えずほつと大きな吐息を漏して、

「手前も御同様、やつと此れで安堵致しました。何事によらず根もない世上の噂といふやつほどいま／＼しいものは御座りません。初手からかうと知つてゐればこんなに瘦せるほど心配は致しません。」

「全く龜井戸の師匠の仰有る通りさ。手前なんざア其れが爲めあれからといふものは夜もおちおち睡眠りません。」と鶴屋の主人は全く生返つたやうに元氣づき、「先生、それではもうそろそろお船の方へお移りを願ひませうか。お歸りは丁度夕涼の刻限かと存じまして先程木挽町の酔月へつまらぬものを命じて置きました。」

「それは／＼。いつもながら鶴屋さんの御心遣には恐縮千萬。」

「お言葉では却て痛み入ります。實はまだいろ／＼と御話を承りたいことが御座ります。丁度今日は龜井戸の師匠もおいで、御座りますし、差詰唯今板木に取りかゝつて居ります田舎源氏の三十九篇、あれはいかゞ致したもので御座りませうか、いづれ船中で御ゆるり御相談致したいと存じて居ります。」

一同は種彦を先に棧橋につないだ屋根船に乗込んだ。

背中一面に一人は菊慈童、一人は般若の面の刺青をした船頭が纜を解くと共にとんと一突棧橋から舳を突放すと、一同を乗せた屋根船は丁度今が盛の上汐に送られ、滑るがやうに心持よく三十間堀の堀割をつたはつて、夕風の空高く竹間屋の青竹の聳立つて居る竹河岸を左手に眺め眞直な八丁堀の川筋をば永代さして進んで行つた。

夏の日には已に沈んで、空一面の夕焼は堀割の兩岸に立並んだ土蔵の白壁をも一様に薄赤く染めなして居ると、其の倒なる家の影は更に美しく満潮の澄渡つた川水の中に漂ひ動いて居る。幾個と知れぬ町中の橋々には夕涼の人の團扇と共に浴衣一枚の軽い女の裾が、上汐のために殊更水面の高くなつた橋の下を潜行く舟の中から見上る時、一入心憎く川風に飜つて居るのである。

一同は種彦の語つた最前の話に百年の憂苦を一朝にして忘れ得た思ひ。酔月から取寄せた料理の重詰を開き川水に杯を洗ひながら、頻に絶景々と叫んで居たが、肝腎な種彦一人は大暑の日中を歩みつゞけた老體につかれを覺えた故か、何となく言葉少く、片脰を舷に背を胴の間の横木に寄せかけたまゝ、簾越しに唯ぼんやり遠い川筋の景色にのみ目を移して居た。

然し船中の一人が不圖種彦の様子を怪しんで、何處ぞ御氣分でもと氣を揉むものがあれば、種彦

は忽ちわざとらしいまでに元氣よく、杯を見事に吞干して、「いや、どうも年ばかりは取りたくないものさ。少し遠路とよみちでもいたすと直ぐにこの通りの始末で御座る。」といつものに變らぬ軽い調子で、「然しまアわれ等お互の身に取つて今日ほど目出度い日はあるまいて。鶴屋さんが折角のお饗應もてなしだ。種員も仙果も遠慮なく頂戴致すがよいぞ。」と云ひながら、然しどう云ふ譯か一同の如く心の底から陶然と酔を催す様子は更に見えなかつた。

種彦は先刻から遠山左衛門尉が事をばいかほど思ふまいと力めて見てもどうしても思返さずにはゐられなかつたのである。顧れば十幾年前芝居町なぞで能く見た折の金四郎と今日の左衛門尉とを思ひ比べると實に不思議な心持になる。遠山は辭を低うして其の邸に伺候した種彦を喜び迎へ、昔に變らぬ剩談じようだんはなしの中にそれとつかず泰平の世は既に過ぎ恐しい黒船は蝦夷松前えぞまつまえあたりを騒がしてゐる折から、世は上下とも積年の餘弊に苦しみつかれて居る様を見ては、われ人共に公祿を食むもの及ばずながら其れゝ一廉の忠義を盡さねばなるまいと、衷心から湧起る武士の赤誠さむらひのこころを仄見はのみせて語つた其の態度其の風采。種彦はどう云ふ機會はすみかわが身の今日こんにちと彼れ遠山の今日とを思比べて、當世の旗本風情にもまだゝあんな立派な考へを持つて居るものがあるのか知らと思ふと、そもそも我から意識して戯作者となりました現在の身の上がいかにも不安に又何とも知れず氣恥しいやうな氣がしてならなくなつた。然しいかほど深い感慨に沈められても種彦は今更それをば船中のも